

中国における鉄器普及以前の農具

小澤 正人

1. はじめに

人類が最初に手にした道具についての定説はないが、石を素材とした「石器」がその一つであったことは間違いない。道具として相応しい堅さを持ち、入手が比較的容易で、さらに加工することもできる石は、道具の素材として長く中心的な役割を果たした。

しかし石器は、金属器の出現により、その地位を明け渡すことになる。人類がどのようにして天然の鉱石から金属を取り出す技術を手に入れたかは明らかではないが、技術改良を進めることで、金属は道具を作る上で不可欠な素材となっていくのである。

最初に道具として加工された金属は銅あるいは青銅である。特に銅と錫の合金である青銅は比較的融点が低いことから加工に適しており普及が進んでいった。その青銅器も、鉄の製錬技術が発明されたことで、やがて鉄器に取って代わられたのである。

このような道具の変遷、すなわち石器から金属器へ、青銅器から鉄器へという変化は中国についてもあてはまる。中国では紀元前3000年紀には青銅器が使われ始めたと考えられているが、普及するのは紀元前2000年紀に入ってからである。一方鉄器は紀元前2000年紀の後半に隕鉄を素材として現れるが、鉱物からの鉄の生産は紀元前1000年紀に入ってから、さらにその普及は紀元前1000年紀後半の春秋時代と戦国時代の交代期と考えられている。従って一般的には紀元前2000年紀以後を「青銅器時代」、紀元前1000年紀後半以後を

「鉄器時代」とする見方がされている。この移行がどのようにおこなわれ、それが社会にどのような影響を与えたかは、中国古代史研究において重要なテーマとなっている¹⁾。

そのなかで青銅器への移行については、道具の種類によりその普及が一様ではないことが知られている。すなわち中国で最初に普及した青銅器は儀礼に用いられた食器・容器・楽器、または兵器や車馬具などであり、農工具の青銅器化は部分的であった。つまり紀元前 2000 年紀以後に発達する国家や王権にかかわる部分では青銅器が普及するが、一般的な生産や生活に関わる部分では、青銅器とともに新石器時代以来の石器や骨器などが併用されていたのである。その意味で青銅器製作の技術は、人間の営みの中では限定された範囲でのみ普及した技術であった。

以上のような中国古代の青銅器のあり方については、研究者間でほぼ意見の一致を見ている。しかし特に青銅農工具の実態についてはなお不明な点が多い。周代考古学に関する研究の現状をまとめた『中国考古学 两周巻』でも、西周時代では「青銅農具の利用は出土量よりも多かったであろう」という見解を述べるに留まっている²⁾。

その背景には鉄器普及以前の農工具の実態が、断片的な考古学調査の報告からしか検証が行われていないことがある。農工具の実態を検証するためには集落遺跡の検討が欠かせないが、紀元前 2000 年紀以後の考古学調査では墓葬の発掘が中心であり、大型都城の調査を除けば集落遺跡の報告はきわめて少ない。また都城の調査も鉄器普及以後となる戦国時代が中心であり、それ以前の西周時代や春秋時代の報告は断片的なものがほとんどである。そのため鉄器普及以前の集落における農工具の実態、伝統的な石器・骨器などの農工具の中に青銅器がどのように普及していったかといった問題については、具体像が描かれないうままになっている。

以上の点をふまえて、本稿では金属器生産技術の出現と金属器の普及が社会に及ぼした影響に関する研究の一環として、近年増加しつつある新たな資料を用い、鉄器普及以前の中国における農工具の実態を明らかにすることを目的としたい。具体的には、近年報告書が刊行された山西省天馬 - 曲村遺跡を取り上げ検討する。この報告書では集落址に関して詳細に報告がなされており、上記の問題を検討する上では貴重な事例となっている。

1 天馬 曲村遺跡の概要

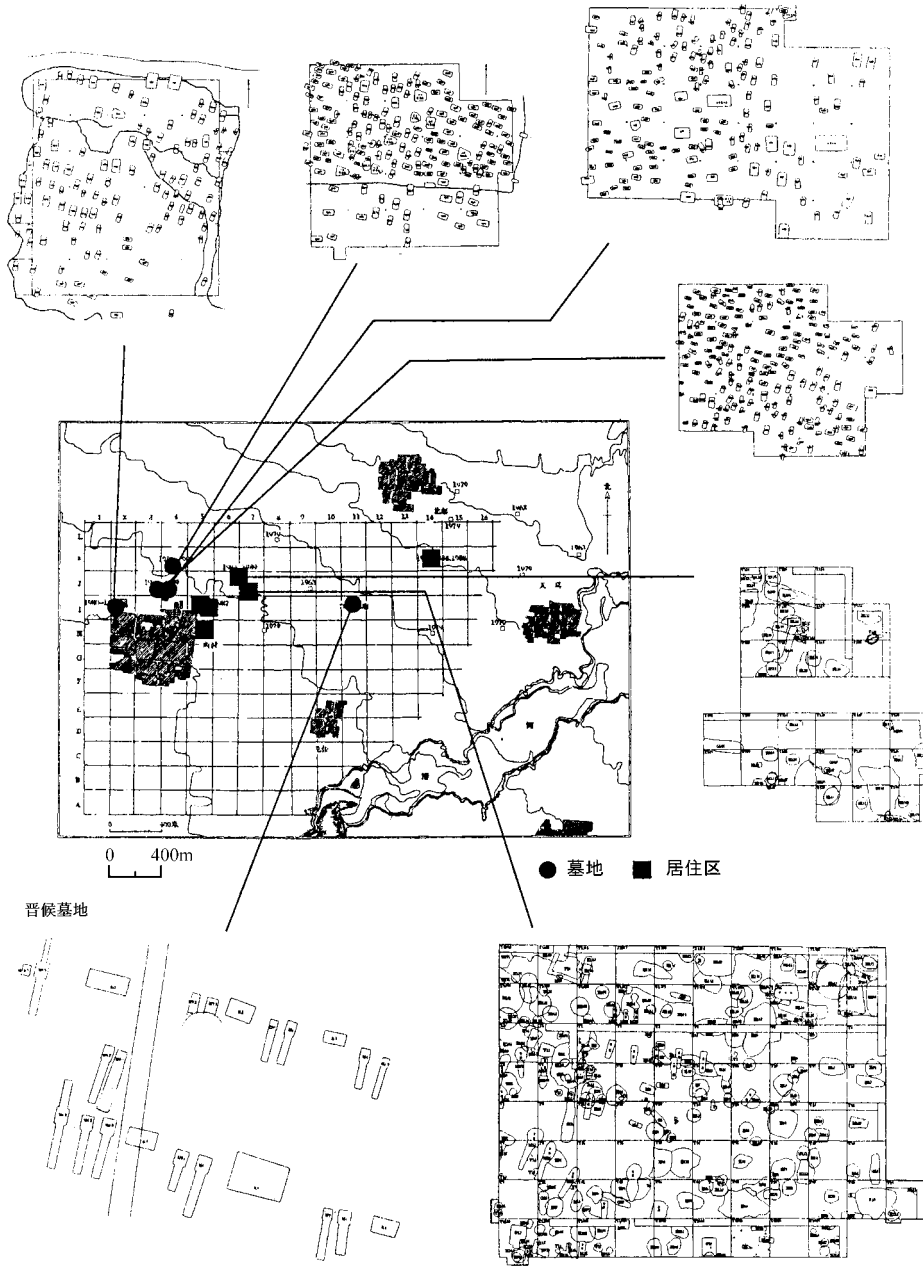
天馬 曲村遺跡は1963年に発見され、試掘により西周後期を中心とした大型の遺跡であることが確認された。その後1979年に北京大学と山西省文物工作委員会が共同で再度分布調査と試掘をおこない、新石器時代から秦漢時代までの複合遺跡であることが判明した。そのうえで1980年から北京大学歴史系考古專業（その後考古学系に改組）と山西省考古研究所による発掘調査が行われた。このうち1989年までの調査報告は2000年に大部の報告書としてまとめられている³⁾。さらに1992年からは遺跡中央部で盗掘された大型墓群の調査が行われている。この発掘では墓葬から晋侯の銘文を持つ青銅器が出土し、この墓地が西周時代中期から春秋時代前期にかけての晋侯とその夫人の墓地であることが判明している⁴⁾。

このように天馬 曲村遺跡は新石器時代からの長期間にわたる遺跡ではあるが、その中心となるのは西周時代から春秋時代中期にかけてである。本稿がこの遺跡を分析例として選択したのはこの点に注目したからである。

第1図は本稿と関連する西周時代から春秋時代中期にかけての主な調査地点である。居住区は遺跡中央部や北側で確認されている。中小墓による墓地は遺跡西側に、大型墓の墓地は遺跡中央部に位置している。

居住区の遺構はほとんどが土坑だが、住居として平地式が1基、半地下式が3基検出され、さらに井戸などが検出されていることから、この地に人が居住していたことがわかる。出土遺物は土器が大きな比重を占めるが、同時に石斧のような木材伐採・加工具、石包丁や石鎌のような収穫具、或いは骨鏟のような土掘り具といった農工具があり、この集落で農業が行われていたことがわかる。ただし遺跡内からは青銅器鋳型も出土しており、青銅器製作工房が付近にあったことが推定される。この他に複数の陶窯も検出されていることから、天馬 曲村遺跡は単なる農村ではなかったと考えられる。

2カ所の墓地のうち西側の中小墓地では、西周時代から春秋時代中期までの墓葬641基が調査されている。この墓地では墓坑はほとんど重複せず整然と並んでいる。その中には青銅器や車馬坑を伴う墓葬もあるが、特に区画された形跡もないことから、共同墓地と考えられる⁵⁾。これに対して東側では17基の大型墓が調査されている。先に述べたようにこれら墓葬から出土した青銅器に



第1図 天馬 曲村遺跡全体図

より、この墓地が西周時代中期から春秋前期にかけての晋侯一族の墓地であることが確認されている。

これら居住区と墓地との関係は明確ではない。大型墓が晋侯の墓地とすると、晋侯が住んだ大型建築址の存在が考えられるが、遺跡内からは大型の建物基壇などは検出されていない。また中小墓のなかには石斧や石包丁のような農工具を副葬した例もあり、隣接する居住区との関連も考えられるが、なお両者の関係を直接物語る遺物は出土していない。ただし同時代の居住区と墓地が隣接して存在していたことから、両者を全く無関係と考えることも難しい。

天馬 曲村遺跡の調査を主導した鄒衡は、晋侯墓地の発見を受け、天馬 曲村遺跡を西周時代から春秋時代中期までの晋の国都とした⁶⁾。従って天馬 曲村遺跡における農工具のありかたは、一般的な農村集落の状況とはいえず、むしろ先進的な農工具のありかたを示しているといえる。

以上が天馬 曲村遺跡の概要であるが、次に具体的な農工具の検討に移りたい。以下まず墓葬出土の農工具を取り上げて検討する。墓葬出土品を取り上げるのは、混入遺物の排除と年代の確定ができることによる。

2 墓葬出土の非金属製農工具

天馬 曲村遺跡では10基の墓葬から農工具が出土しており、その材質には石・骨・貝・青銅などがある。以下時期ごとに個別に墓葬と出土農工具を取り上げて検討する⁷⁾。なお晋侯大墓群については、報告が簡報のみで断片的なため今回は検討からは除外した。

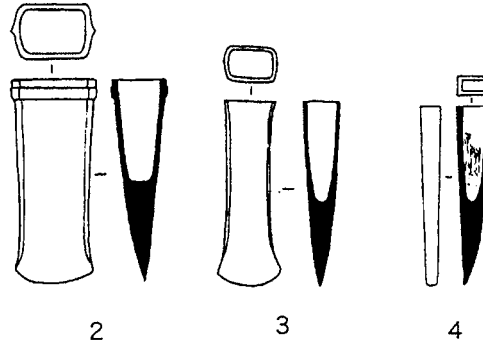
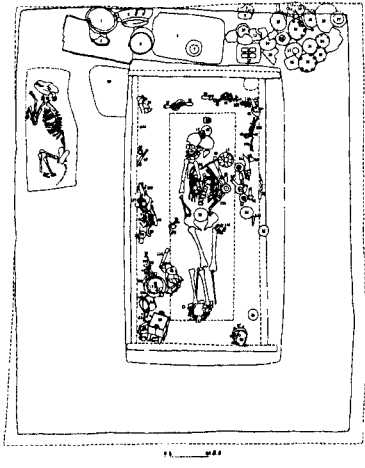
(1) 西周時代前期

6081号墓

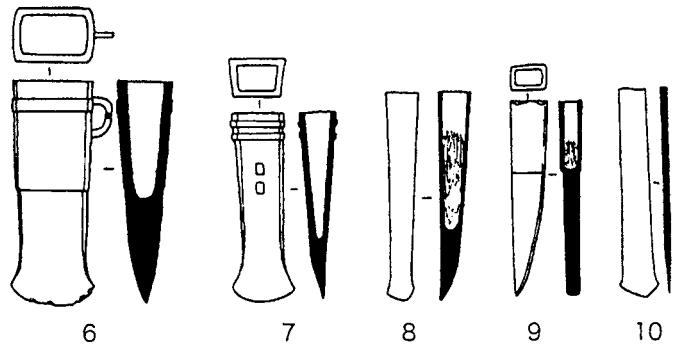
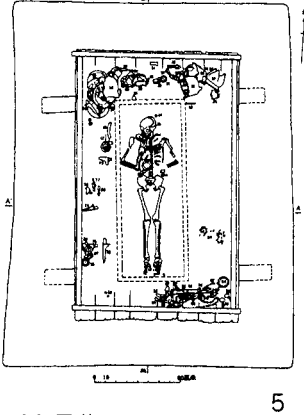
6081号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木槨墓である(第2図1)。墓口は長さ4.1m、幅3.05~3.15m、墓底は長さ4.25m、幅3.25~3.4mを測り、中小墓地のなかでは大型の墓坑である。墓主は出土骨から男性とされている。

出土遺物には礼器・兵器・車馬具などの青銅器、多量の玉器、子安貝、漆器、土器などがある。農工具としては青銅製の斧と鑿がある。斧は2点出土しており(第2図2・3)、いずれも柄を装着する袋部があり、先端がやや広がる。2はやや幅が広く、長さ11.6cm、刃部幅4.8cmを測る。3は長さ10.6cm、刃部幅3cmを測る。鑿もやはり袋部があり、先端まで直線的にすばまっている(第

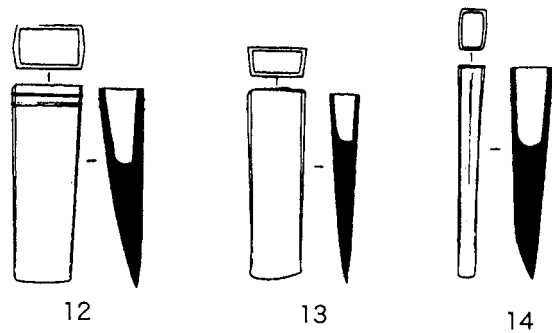
6081号墓



6231号墓



6130号墓



墓葬



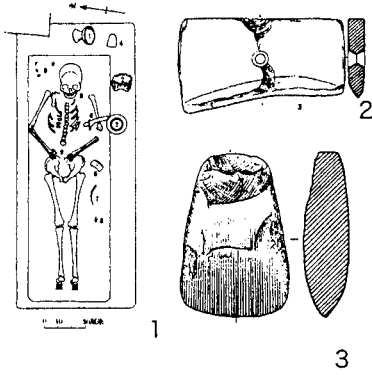
遺物



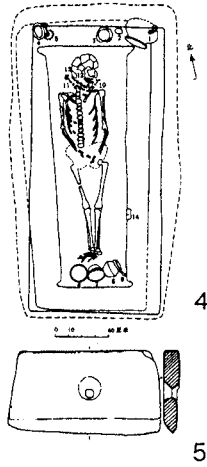
第2図 墓葬出土の農工具(1)

中国における鉄器普及以前の農工具

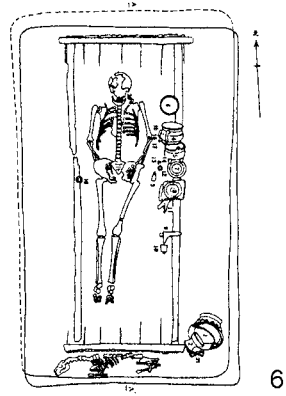
6078 号墓



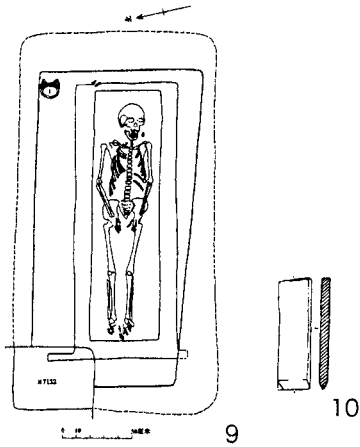
6150 号墓



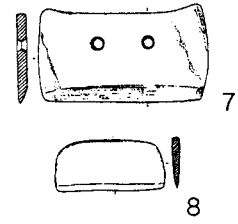
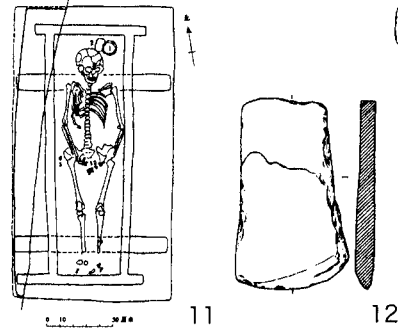
6243 号墓



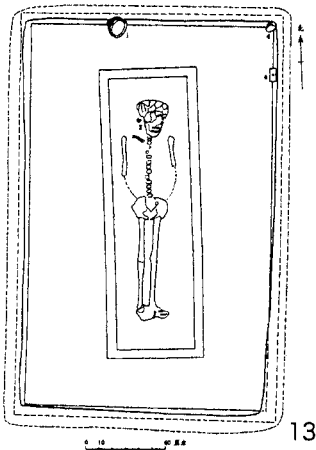
7133 号墓



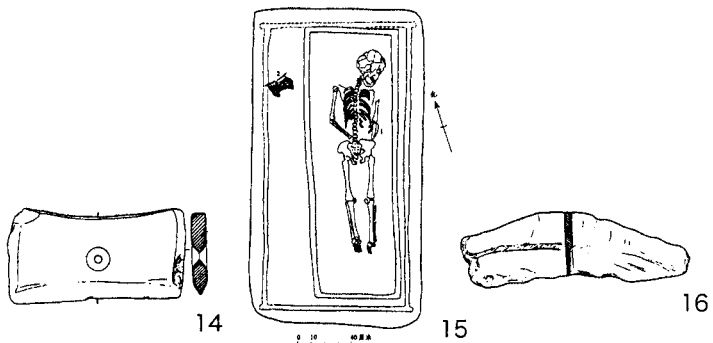
6404 号墓



5048 号墓



5036 号墓



墓葬 0 1m

遺物 0 10cm

第3図 墓葬出土の農工具(2)

2 図 4)。長さ 10.2cm, 刃部幅 1cm を測る。

6231 号墓

6231 号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木槨墓である(第 2 図 5)。墓口は長さ 3.85m, 幅 2.7~3.15m, 墓底は長さ 4.2m, 幅 3.28~3.12m を測り, 中小墓群の中では規模が大きい墓葬である。墓主は出土骨から 35 歳前後の男性とされている。

出土遺物には礼器・兵器・車馬具などの青銅器, 多量の玉器, 子安貝, 漆器, 土器などがある。農工具では青銅製の斧と鑿が出土している。斧は 2 点出土している(第 2 図 6・7)。6 は柄を装着する袋部を持ち, 両耳がつき, 先端はやや広がっている。長さ 12.6cm, 刃部幅 4.5cm を測る。7 も袋部を持ち, 先端が広がるが, 両耳はない。長さ 11cm, 刃部幅 3.3cm を測る。鑿は 2 点出土しており, いずれも袋部を持つ(第 2 図 8・9)。8 は先端がやや広がるタイプで, 長さ 11.8cm, 刃部幅 1.5cm を測る。9 は直線的にすばまるタイプで, 長さ 11.4cm, 刃部幅 1cm を測り, 袋部には木柄の残片が残っていた。残る 1 点は板状で, 先端が広がる。長さ 12.1cm, 幅 2cm を測る(第 2 図 10)。

6130 号墓

6130 号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木槨墓である(第 2 図 11)。墓口と墓底は同じ大きさでは長さ 3.53m, 幅 2.1m を測る。墓主は出土骨から成年男性とされている。

出土遺物には礼器・兵器・車馬具などの青銅器, 玉器, 子安貝, 漆器, 土器などがある。農工具には青銅製の斧と鑿がある。斧は袋状斧で, 2 点出土している(第 2 図 12・13)。いずれも先端に向かい直線的にすばまり, 袋部には装着時の木柄の残片が残っていた。12 は長さ 11.7cm, 刃部幅 3.3cm, 13 は長さ 11.3cm, 刃部幅 3cm を測る。鑿は 1 点出土しており, 柄を装着する袋部を持つ(第 2 図 14)。先端に向かい直線的にすばまるタイプで, 長さ 12.4cm, 刃部幅 1cm を測る。袋部には装着時の木柄の残片が残っていた。

6078 号墓

6078 号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木棺墓である(第 3 図 1)。墓口と墓底はほぼ同じで, 長さ 2.2m, 幅 0.85m を測る。墓主は出土骨から女性とされている。

出土遺物には銅戈・銅鏃といった青銅兵器の他, 土器, 子安貝などがある。農工具では石斧 1 点, 石包丁 1 点が出土している。石斧は二層台上で土器とと

もに、石包丁は木棺内から出土しており、後世の混入とは考えがたい。石斧は両刃で長さ9.5cm、刃部幅6cmを測る(第3図2)。石包丁は長さ9.4cm、幅4.5cmで、中央に1カ所穿孔されている(第3図3)。

6150号墓

6150号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木槨墓である(第3図4)。墓口は長さ2.2m、幅1.0mで、墓底は長さ2.4m、幅0.5~0.62mを測る。墓主は出土骨から25歳前後の女性とされている。

出土遺物は土器、骨飾り、子安貝、砥石・漆器の痕跡などである。農工具では石包丁1点が出土している。石包丁は木棺内から出土しており、後世の混入とは考えられない。長さ9cm、幅4.5cm、中央に1カ所穿孔されている(第3図5)。

6243号墓

6243号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木槨墓である(第3図6)。墓口は長さ2.75m、幅1.7mで、墓底は長さ2.82m、幅1.7mを測る。墓主は出土骨から17・18歳前後の男性とされている。

6243号墓からは礼器・兵器・車馬具などの青銅器、子安貝、土器などが出土している。農工具では石包丁が2点出土している。石包丁はいずれも木棺内で墓主の脇から出土しており、混入とは考えられない。2点の石包丁のうち1点は方形で、報告書のA型にあたる(第3図7)。長さ10cm、幅5.3cmで、2カ所に穿孔されている。いま一点は半月形で報告書のB型にあたる(第3図8)。長さ6.3cm、幅2.8cmを測る。

7133号墓

7133号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木槨墓である(第3図9)。墓口は長さ2.35m、幅1.09~1.18mで、墓底は長さ2.6m、幅1.58mを測る。墓主は出土骨から28歳前後の男性とされている。

出土遺物には土器と子安貝があり、農工具では両刃の石鑿が1点出土している(第3図10)。石鑿は木棺上から他の遺物と共に出土したとあり、やはり混入は考えられない。長さ6.2cm、刃部幅は0.6cmを測る。

(2) 西周時代中期

6404号墓

6404号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木槨墓である(第3図11)。墓口は長さ2.3m、幅1.2mで、墓底もほぼ同じ大きさである。墓坑のうち東側の木槨頂

部より上部は破壊されているが、その他の部分は破壊を免れている。墓主は出土骨から男性とされている。

出土遺物は土器の高が1点と子安貝、そして石斧1点である(第3図12)。石斧は髑とともに木棺内の被葬者頭部に置かれており、混入とは考えられない。石斧は両刃で長さ11.1cm、刃部幅6.3cmを測る。

(3) 西周時代後期

5048号墓

5048号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木槨墓である(第3図13)。墓口は長さ3.1m、幅1.9mで、墓底は長さ3.25m、幅2.13mを測る。墓主は出土骨から40~45歳の女性とされている。

出土遺物には土器・子安貝などがある。農工具では石包丁が1点出土している(第3図14)。石包丁は墓坑東壁に張り付いて出土しており、後世の混入とは考えられない。長さ10.5cm、幅4.5cmを測り、中央に1カ所穿孔されている。

(4) 春秋時代前期

5036号墓

5036号墓は墓坑が長方形の竪穴土坑木槨墓である(第3図15)。墓口は長さ2.45m、幅1.30mで、墓底もほぼ同じ大きさである。墓主の骨は検出されているが、性別・年齢などは不明。

出土遺物は土器と、貝鎌一点が出土している(第3図16)。この貝鎌には鋸歯がないことから、報告者は半製品と考えている。鎌状器は木棺内の墓主脇から出土しており、混入とは考えられない。長さ13.6cmを測る。

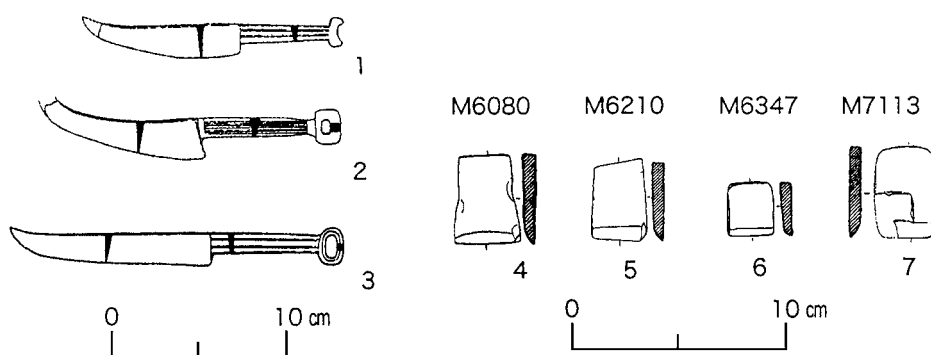
(5) 時代不明の墓葬出土の農工具

墓葬のなかには年代を決定できる副葬品が無く、細かい年代を決められない例がある。このような墓葬からも農工具の出土例がある(第4図1~3)。出土したのはいずれも青銅刀子で、1は6378号墓出土、墓主は40~45歳の女性。2は7016号墓出土で、墓主は17~18歳の男性。3は6222号墓出土で、墓主は30~35歳の男性であった。

(6) 玉製の石斧

ここまでの農工具はいずれも実用品と考えられるが、これ以外に玉製の片刃石斧が複数の墓葬から出土している。これら玉製品は実用品とは考えられないが、実用品の片刃石斧を模倣したものと考えられる(第4図4~7)。

中国における鉄器普及以前の農工具



第4図 墓葬出土の青銅刀子・玉器

玉製片刃石斧は6080号墓(4), 6210号墓(5), 6347号墓(6), 7113号墓(7)からそれぞれ1点ずつ出土している。時期は6080号墓, 6210号墓, 6347号墓が西周時代前期, 7113号墓が西周時代中期である。墓主は6080号墓, 7113号墓が女性, 6210号墓が男性, 6347号墓は不明である。

以上が墓葬から出土した農工具であり, 器種としては青銅器の斧・鑿・刀子, 石器の斧・鑿・石包丁, さらに貝器の鎌がある。このうち青銅斧・鑿は木材伐採・加工具と考えられるが, 斧についてはクワのような土掘り具の可能性もある⁸⁾。

このように年代が確定でき, 後世の混入もない墓葬から石器や貝器などの農工具が出土したことから, 天馬 曲村遺跡で西周時代以降も石器や貝器の農工具が使われていたことは疑いない。


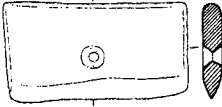
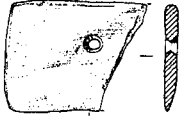


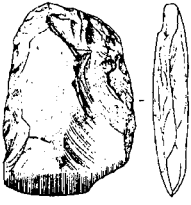
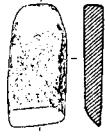
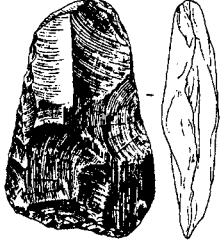
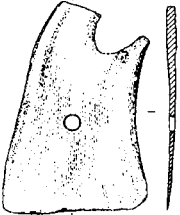
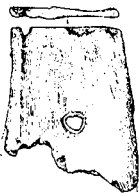
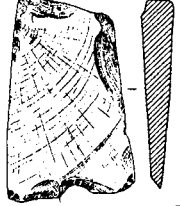


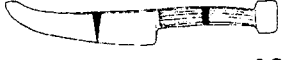
以上の結果をふまえて, 次に居住区からの出土品を検討してみたい。

3 居住区出土の農工具

居住区で検出された遺構には住居, 井戸, 陶窯などがあるが, ほとんどは性格不明の土坑で, 253基が検出されている。各遺構は出土遺物, 層位関係などから西周時代前期・中期・後期, 春秋時代前期・中期の五期に分けられている。この分期を基に, 出土した農工具のうち代表的なものを選びまとめたのが第5図である。以下この図に沿って各時期ごとの出土品を検討する。

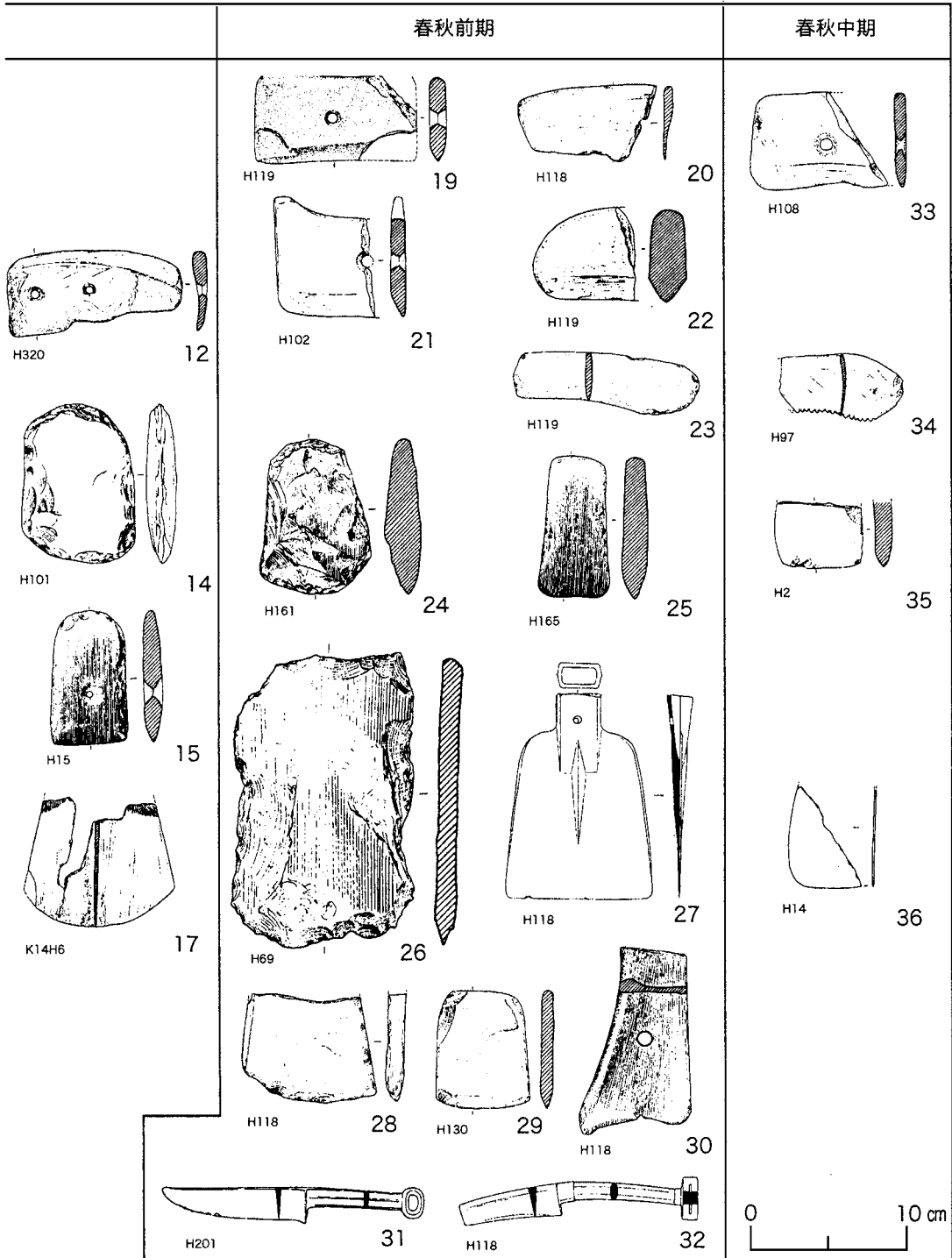
(1) 西周時代前期

西周前期の農工具には, 石包丁, 石斧, 骨鏟, 青銅刀子がある。

	西周前期	西周中期	西周後期
收穫具	 <p>H142 1</p>	 <p>H327 5</p>	 <p>H140 10</p>
		 <p>H181 6</p>	 <p>H51 11</p>
石斧	 <p>H142 2</p>	 <p>H111 7</p>	 <p>H205 13</p>
鍬	 <p>H142 3</p>	 <p>H111 8</p>	 <p>H155 16</p>
刀子	 <p>H142 4</p>	 <p>H403 9</p>	 <p>H326 18</p>

第5図 居住区出土農工具

中国における鉄器普及以前の農工具



左下の数字は出土遺構 H = 土坑

石包丁は報告されているのは7点で、ほとんどが破損品であった。報告書でA型に分類された長方形の形状を示すものが多い(1)。穿孔は1カ所が多く、2カ所は1点のみであるが、破損品の中には2カ所の可能性があるものもある。石斧の報告は1点のみ(2)。この石斧は打製で刃部のみが磨製である。両刃で使用痕確認されている。骨鏟は1点のみが報告されている(3)。牛の下顎骨を使っており、穿孔が1カ所ある。青銅刀子は1点のみが報告されている(4)。方環首で刃部先端が外反している。

(2) 西周時代中期

西周中期の農具には石包丁、石斧、骨鏟、青銅刀子がある。

石包丁は13点が報告されているが、やはりほとんどが破損品である。前期同様にA型が多いが(5)、背部中央が窪み、両端が外反する報告書分類のC型もある(6)。穿孔は1カ所が多く、2カ所は1点のみだが、破損品に2カ所の可能性があるものもある。石斧の報告は1点のみで、片刃の磨製石斧である(7)。骨鏟は下顎骨を使っており、1カ所穿孔がある(8)。青銅刀子も1点のみが報告されている(9)。方環首で刃部先端が外反する。

(3) 西周時代後期

西周後期の農具には石包丁、貝包丁、石斧、石鏟、骨鏟、青銅刀子がある。

石包丁は13点報告されているが、前期・中期同様ほとんどが破損品である。形状はほとんどがA型であるが(10)、報告書でB型に分類された半月形で穿孔がない例も1点報告されている(11)。貝包丁は1点のみ報告されている(12)。石斧は3点報告されている。13は打製石斧で、一部磨製。両刃である。14は磨製石斧であるが、破損している。15は両刃の磨製石斧。穿孔がある。石鏟は1点のみ報告されている(16)。打製。骨鏟も1点のみ報告があり(17)、小動物の頭蓋骨を加工したものとされている。青銅刀子は1点が報告されており(18)、方環首で刃部先端が外反する。

(4) 春秋時代前期

春秋前期の農具には、石包丁、貝包丁、石鎌、石斧、石鏟、骨鏟、青銅鏟、青銅刀子がある。

石包丁は28点が報告されているが、ほとんどが破損品である。形状は大部分がA型であるが(19)、B型(21)、C型(22)も出土している。貝包丁は1点のみが報告されている(20)。石鎌も1点のみ報告されている(23)。石斧は2点が報告されている。24は局部磨製の打製石斧で、両刃である。25は両

刃の磨製石斧である。石鏟は一部分のみの破片も含めて、5点が報告されている。このうち26・28は幅広のタイプで、28は刃部の破片である。29は幅が狭いタイプである。骨鏟は1点のみ報告されており、動物の肩胛骨から作り出しており、穿孔が一カ所ある(30)。青銅鏟は袋状の鏝で、穿孔がある(27)。青銅刀子は刃部がやや外反するタイプ(31)と、内弯のタイプ(32)がある。

(5) 春秋時代中期

春秋中期の農工具には石包丁、貝鎌、石斧、青銅鏟がある。

石包丁は6点が報告されている。やはり破損品が多く、ほとんどがA型・1孔である(33)。貝鎌は一点が報告されている(34)。35は石斧刃部の破片で、磨製。36は青銅鏟の破片である。

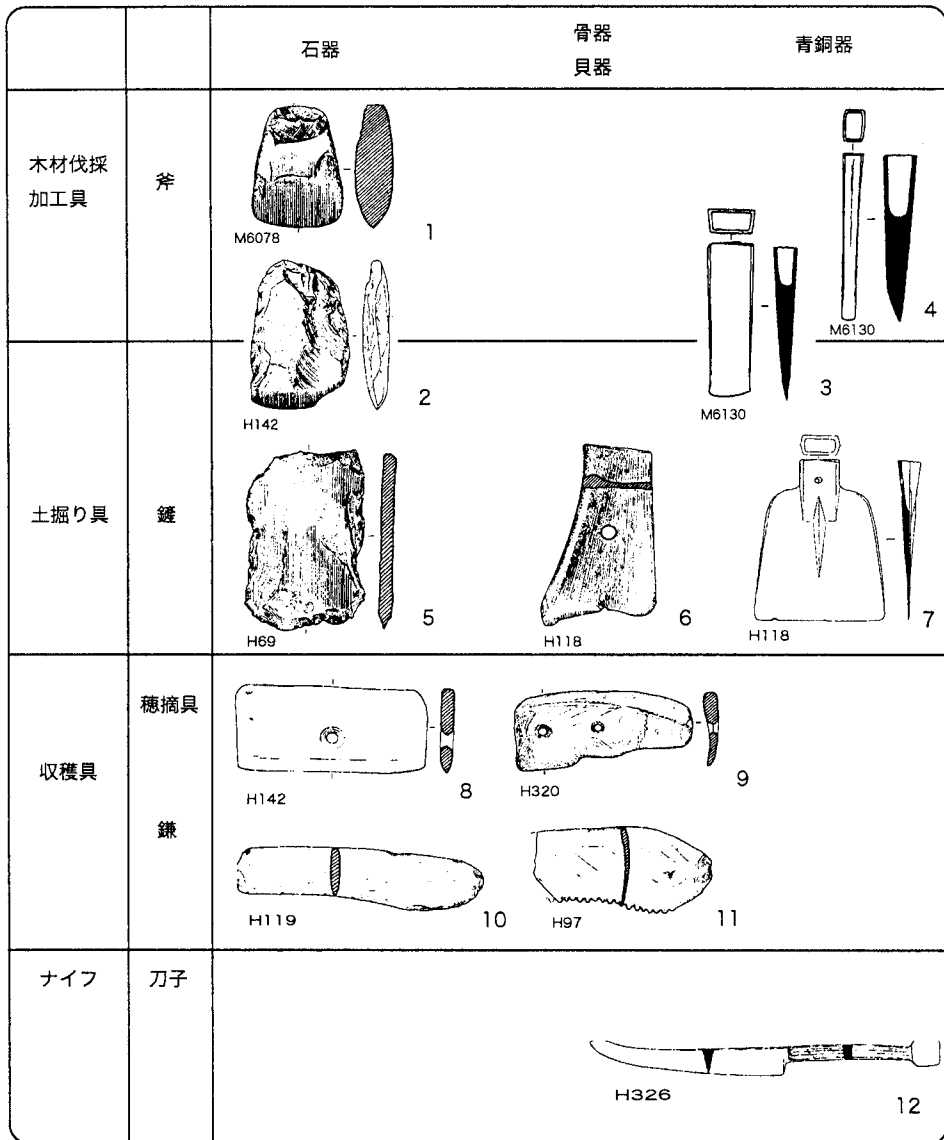
以上の居住区出土の農工具は、用途からみると収穫具、石斧、土掘り具、ナイフ類に分けられる。

収穫具では穂摘具の石包丁の出土例が多い。このほか貝包丁の出土例もあるが、保存の問題があるためか出土例は多くはない。鎌には石鎌と貝鎌があるが、出土例は春秋時代前期以降である。石斧には打製石斧と磨製石斧がある。打製石斧は一部を磨製とした例が多く、機能としては土掘り具、あるいは木材伐採・加工具が想定される⁹⁾。磨製石斧は木材の伐採・加工具と考えられる。土掘り具には鏟があり、骨製、石製、青銅製などが出土しており、最も素材の種類が多い。ナイフ類には青銅の刀子がある。

4 西周時代から春秋中期の農工具

以上、墓葬及び集落出土の農工具について見てきたが、次にこれを基にして、西周時代から春秋時代中期にかけての農工具の実態について考えてみたい。まず出土した農工具をその機能から、木材伐採・加工具、土掘り具、収穫具、ナイフ類に分け、それぞれの内容や出土状況について整理してみたい(第6図)。

木材伐採・加工具には青銅斧(3)、青銅鏝(4)、石斧(1,2)などがある。このうち青銅斧・鏝は集落からは出土しておらず、またこれらを副葬した墓葬も、墓坑が大型でありなおかつ青銅器を多数副葬するなど、ランクが高い墓葬であった。このことは青銅斧や鏝が貴重な道具であったことを表している。石斧には磨製(1)と打製(2)があり、墓葬からは磨製石斧のみが、居住区から



第6図 天馬 曲村遺跡出土農工具（縮尺不同）

左下の数字は出土遺構 H = 土坑 M = 墓葬

は両者が出土している。なお青銅斧・打製石斧については木材伐採・加工具の他に、土掘り具としての用途も考えられている。

土掘り具には青銅斧(3)・青銅鍬(7)・打製石斧(2)・石鍬(5)・骨鍬(6)などがある¹⁰⁾。このうち打製石斧は土掘り具の可能性が高いが、木材伐採・加工具としての使用法も想定できる。それに対して青銅鍬・石鍬・骨鍬は純粋な

土掘り具と考えられる。ただし墓葬から出土例があるのは青銅斧のみで、他の土掘り具は副葬品には選ばれていない。逆に青銅斧は居住区からは出土していないことは先に述べたとおりである。

収穫具には石包丁(8)・貝包丁(9)、刈り取り具としての石鎌(10)、貝鎌(11)がある。このなかで出土点数が多いのは穂摘具、なかでも石包丁である。石包丁は墓葬・居住区の両者から出土している。墓葬では女性に副葬される例が多いが、男性への副葬例もあり、性による厳密な規制があったわけではないようである。貝包丁・石鎌は居住区から、貝鎌は墓葬から出土している。

ナイフ類は多様な用途に使えるもので、青銅刀子があてはまる(12)。青銅刀子は居住区と墓葬から出土例がある。

以上が天馬 曲村遺跡における西周時代から春秋時代中期までの農工具の内容と出土状況であるが、これから次のようなことがわかる。

まず天馬 曲村遺跡では西周時代から春秋時代中期にかけて、農工具に石器・貝器・骨器・青銅器などが混在していたことが確認された。つまり新石器時代以来の石器・骨器・貝器などの農工具が、西周時代に至ってもそのまま使われていたのである。これを青銅器の普及という視点から見れば、青銅農工具は普及はするが、石器・骨器・貝器などを完全に置き換えるようにはならなかった、ということになる。

さらに青銅農工具の普及も器種により違いが見られる。

例えば収穫具では青銅製の穂摘具や鎌などが出土していない。青銅製の収穫具としては青銅鎌が知られているが、天馬 曲村遺跡では出土例がない。さらに墓葬から出土した収穫具も石包丁など青銅器以外であることから、天馬 曲村遺跡では収穫具の青銅器化がほとんど進んでいなかったと考えられる¹¹⁾。この点は同じ地域に位置する山西省侯馬市の鑄銅遺跡において、春秋時代中期とされた鑄型の中に収穫具が無いこととも符合する¹²⁾。

つまり青銅器への移行がすべての道具で同じ速度で進んだのではなく、青銅器への移行による効果が大きいと考えられる器種から青銅器化が進んでいったのである。石包丁の出土量が多いことからみて、西周時代から春秋時代中期には穂摘による収穫が中心と考えられるが、これら穂摘具を青銅器化してもその効果があがらないため、青銅器には移行しなかったのであろう。それに対し、木材伐採具・加工具、土掘り具、さらに多様な用途に使われるナイフ類の場合は、青銅器化した効果が認められたことで、青銅製品が作られるようになった

と考えられる¹³⁾。

このような青銅器の普及に器種により違いが生じた原因は、多くの研究者が指摘しているように、原材料としての青銅の供給が十分でなかったことに求められる¹⁴⁾。

例えば斧には青銅製・石製両者があるが、墓葬からの出土例を見ると、大型の墓坑で青銅器などの副葬品が多い墓葬からは青銅斧が出土し、小型で副葬品も少ない墓葬からは石斧が出土しており、青銅斧が石斧よりも副葬品として上位に位置づけられていたことがわかる。このことは青銅斧が石斧よりも貴重であったことを意味しているのであり、それは青銅が石よりも希少な存在であったことに由来すると考えられる。

ただし青銅器が希少であったとしても、その普及を過度に低く見積もることも実態とは異なる。天馬 曲村遺跡の居住区や小型の墓葬からは多機能のナイフである青銅刀子が出土している。青銅刀子はその機能から考えると個人での使用と所有が想定されるのであり、それが居住区や決して大きくはない墓葬から出土することは、青銅刀子が個人で所有できないほど希少で貴重ではなかったことを表している。このことは、青銅農工具が実用にほとんど供されないほど貴重なものではなく、一般の日常生活においても一定の普及をみていたことを反映している。

もっとも遺跡概要でも述べたように、天馬 曲村遺跡は晋の国都に関連する遺跡と考えられるのであり、一般的な農村集落では青銅農工具の普及度はより低かったと考えられる。

おわりに

以上天馬 曲村遺跡遺跡から鉄器普及以前の農工具の状況を見てきた。

中国では青銅器の製作が開始された後も、それがすべての道具に普及したわけではなかった。本稿では西周から春秋中期にかけての様相を、天馬 曲村遺跡遺跡を例にしてみてもきたわけだが、青銅器は一般の農工具として使われる程度には普及していたが、晋の国都に関連するこの遺跡でも、石器・貝器・骨器といった新石器時代以来の農工具に完全に取って代わることはなかった。その背景には道具の素材として青銅器が優位であっても、青銅そのものの供給に問題があったことが想定されるのである。

従って金属器の完全な普及は鉄器の普及を待たなければならなかったのであり、その具体像を明らかにすることが次の課題となる。

注

- 1) このテーマを扱った近年の著作としては以下のものがある。
華覚明『中国古代金属技術』(1999年 大象出版社 鄭州)
白雲翔『先秦兩漢鉄器的考古学研究』(2005年 科学出版社 北京)
- 2) 中国社会科学院考古研究所編『中国考古学 两周卷』(2004年 中国社会科学出版社 北京)
- 3) 北京大学考古学系商周組・山西省考古研究所『天馬 曲村 1980-1989』(2000年 科学出版社 北京)
- 4) 北京大学考古学系・山西省考古研究所「1992年春天馬 曲村遺址墓葬發掘報告」(『文物』1993年第3期)
北京大学考古学系・山西省考古研究所「天馬 曲村遺址北趙晋侯墓地第二次發掘」(『文物』1994年第1期)
山西省考古研究所・北京大学考古学系「天馬 曲村遺址北趙晋侯墓地第三次發掘」(『文物』1994年第8期)
山西省考古研究所・北京大学考古学系「天馬 曲村遺址北趙晋侯墓地第四次發掘」(『文物』1994年第8期)
北京大学考古学系・山西省考古研究所「天馬 曲村遺址北趙晋侯墓地第五次發掘」(『文物』1995年第7期)
- 5) この墓地を飯島武次は「貴族墓・平民墓」としている。
飯島武次『中国周文化考古学研究』(1998年 同成社 東京)
- 6) 鄒衡「論早期晋都」(『文物』1994年第1期)
- 7) 本稿で取り上げた農工具の他に、報告書では青銅製・骨製の「錐」がある。ただし断片的な資料が多いため、今回は取り上げなかった。
- 8) この点については以下の論文を参照。
天野元之助『中国農業史研究 増補版』(1979年 御茶の水書房 東京)
佐野元「中国春秋戦国時代の農具鉄器化の緒問題」(潮見浩先生退官記念事業会編『考古論集潮見浩先生退官記念論文集』所収 1993年 潮見浩先生退官記念事業会)
- 9) 打製石斧については以下の論文を参照。
川本素行「打製石斧の分析」(『古代』81号 1986年)
- 10) 江西省銅緑山遺跡の銅採掘遺構からは木製の鏟が出土している。この木製鏟には青銅製の鋤先などをつけた形跡がないことから、刃先などはつけずに使われたと考えられる。この銅緑山遺跡の例から考えると、天馬 曲村遺跡でも木製鏟のような土掘り具が使われていた可能性が高い。
黄石市博物館『銅緑山古礦冶遺跡』(1999年 文物出版社 北京)
- 11) ただし長江流域では銅鏟の出土からも明らかなように収穫具の青銅器化が進んでおり、地域差があったことがわかる。
白雲翔「齒刃銅鏟初論」(『考古』1985年第3期)

社会イノベーション学部

- 12) 山西省考古研究所『侯馬鑄銅遺跡』(1993年 文物出版社 北京)
- 13) 佐原真は民族例などから樹木の伐採時での石斧と鉄斧の効率は、石斧を1とすると鉄斧が4と考えられることを指摘している(佐原真『斧の文化史』1994年 東京大学出版会 東京)。佐原は青銅斧と石斧の効率について触れていないが、石斧よりは効率的であったと考えられる。
- 14) 天野元之助前掲書 703頁
白雲翔「我国青銅時代農業生産工具的考古発現及其考察」(『農業考古』2002年第3期)

付記 本稿は2005年度成城大学特別研究助成「イノベーション学の創世」による研究の成果である。